

Café bohemia

Motoharu Sano Official Fan Association since 1986

<http://mofa.moto.co.jp/> 2015 夏 Vol.137



Café bohemia Vol.137

編集長: 大山貴
副編集長: 山田和弘
編集: 奥山千亜紀 小林史明 矢島一朗
編集協力: MFMP
デザイン: コヤママサシ
印刷: 高千穂印刷(株)
ファンクラブマネージメント: 有限会社カミングスター

監修: 佐野元春

Café bohemia Vol.137 June / 2015

発行: mofa 〒150-8691 東京都渋谷区私書箱76号
編集: カフェボヘミア編集部 tel.03-5469-0922

<http://mofa.moto.co.jp/>

Café bohemiaに掲載された記事を許可なく転載することを禁止いたします。
2015 © M's Factory Music Publishers Inc. All rights reserved.

mofa



MOTOHARU SANO & THE COYOTE BAND

崩れるか、持ちこたえるか。混迷の時代に放たれた純度高いDANCE ROCK 12編。

BLOOD MOON

(ブラッド・ムーン)

2015年7月22日 発売



初回限定ボックス盤 **生産限定**

全12曲収録 / ミュージック・ビデオ6曲 / 100頁豪華写真集 / 佐野元春 直筆詩シート / 未収録曲ダウンロード・パスキー



通常版

全12曲収録 / 32頁インナースリーブ



アナログ盤 **生産限定**

全12曲収録
高音質マスターからのカッティング
180グラム重量盤 LP



USBハイレゾ盤 **生産限定**

全12曲収録
24bit/96kHz FLAC and Apple Lossless
ミュージック・ビデオ6曲 MPEG-4/H.264 (720p)
100頁豪華写真集(紙仕様)



デジタル・ダウンロード

全12曲
Mastered for iTunes
予約特典
「優しい闇」先行ダウンロード

'BLOOD MOON'トラックリスト

- | | | |
|-------------|-----------|------------------|
| 01. 境界線 | 05. 優しい闇 | 09. 誰かの神 |
| 02. 紅い月 | 06. 新世界の夜 | 10. キャピアとキャピタリズム |
| 03. 本当の彼女 | 07. 私の太陽 | 11. 空港待合室 |
| 04. パイ・ザ・シー | 08. いつかの君 | 12. 東京スカイライン |

ミュージック・ウィズ・アートワーク。

音楽のカ、アートのカを大人にも思い返してほしい。

今年の6月3日も満月。

アルバムタイトルも「BLOOD MOON」。
運命が月に関連しているなあ。

ー デイジー・ミュージック11周年、おめでとう
ございます。

元春：ありがとうございます。10周年もみなさんにお祝いしてもらったんだけど、もうそれから一年ですから嬉しいですね。この約10年にスタジオレコーディングが5作、約二年に一枚のリリースというのはレコードメーカーとしては健康的ですね。がんばったと思います。

ー 6月3日、ちょうど今年も満月だったので
すよね。

元春：ほんと、不思議だね。思い返せば11年前、青山のCAY(カイ)というレストランでデイジー・ミュージック発足のパーティーをやりました。パーティーが終わって外に出たら空にきれいな満月が煌々と照っていて、お月さまがウエルカムしてくれているな、という感じがした。11年経ってまた空を見上げたら同じ満月だった。次のアルバムのタイトルは「BLOOD MOON」ですけれども、最近は何か僕の運命が月に関連しているなあと感じています。

ー いよいよリリースが来月に迫りました新作
「BLOOD MOON」ですが、「COYOTE」「ZOOEY」に続く三部作の完結版という位置
付けになると伺っています。「BLOOD MOON」
のコンセプトやテーマについてお聞かせください。

元春：今回のアルバムは、ザ・コヨーテ・バンド
(CB)のバンドとしてのアイデンティティが

しっかり確立したアルバムだと言える。僕たちは結成して11年目を迎えました。この間二枚のスタジオレコーディング、それから何回もの全
国ツアー、ライブツアーを行ってきました。そうした僕たちの経験のすべてがよい形としてこの
「BLOOD MOON」アルバムに結実してい
ると自信を持っています。

ー まずはパッケージの内容からお話いただけ
ますか。

元春：初公開ですね。(各パッケージを見せ
ながら)これがアナログ盤、これが初回盤。こ
れが初回限定ボックスでこんな感じに開く。
USBハイレゾ盤と初回限定盤と外箱の形は
同じなんですけれども中身が違います。この
レーベルは僕がデザインしました。こちらの
ディスクが撮り下ろしの6曲入りのミュー
ジッククリップ。そして僕の直筆の詩を一編、
折り込みます。それとダウンロード・パスキー
が一個入っていて、パッケージに収録していな
い楽曲が一曲ダウンロードできます。それか
ら10ページのブックレットと詩集です。今回
全部、詩は縦書きにした。これらがセットされ
て販売されます。そしてこれがUSBメモリ、
これは新ジャンルの製品です。この中に僕が
スタジオで聴いている音と同音質の高音質音
源を12曲、それから6曲のミュージックク
リップが入る。形態としては、この他に通常
盤、DL(ダウンロード)版。すなわち4つの
パッケージとDLという形態で今出します。

今、音楽リスナーの環境が多様化しています。
僕はアナログで聴きたいな、僕はiPhone
でDLでいいよって。それぞれのリスナー環
境に合わせて、ファン、リスナーが選べるよう

なラインナップにしてみました。ここまで

しっかりした考えをもとにこうしたパッケ
ージを打ち出すのは業界でも初めてだと思うし、
特にUSBパッケージは珍しいと思う。大手
はみんなダウンロードで解決していま
すけれども、敢えて今回僕たちはダウンロー
ディングではなく、パッケージでリリースす
る。それはマーケティングリサーチによつて
40代以上の方はHD(ハイレゾ)を求めている
という結果から。彼らはやはりよいアート
ワーク、よいパッケージとともに音楽を楽し
みたいという気持ちが強いという結果です。
デイジー・ミュージックとしてもそうした彼ら
に伝えていきたい、形として残していただきた
い。ですのでUSBパッケージという選択肢を
残しました。ちょっとレーベルオーナー的な発
言になっちゃったよね(笑)。アーティスト佐野
元春に戻らないと。

ー アートワークについてお聞きします。ヒプノ
シスの雰囲気を感じますね。

元春：ヒプノシスの流れのアーティストで
すね。(フロントカバールのアートワークを指さ
しながら)アーティスト名、タイトル。中は何も
書かずに曲名とクレジット、必要最小限のテ
キストになっています。

ー 今回アートワークをStormStudiosに依頼
した経緯や佐野さんがどんなお考えでいらした
のかお聞かせいただけますか。

元春：よいアルバムアートワークをファン
にプレゼントしたかった。僕も10代の頃から
いろいろな音楽アルバムを見てきたよ。自分
の中であのアルバムいいなとか、このアルバ

ムすごく記憶に残っているなとか、それなりに
ある。僕の考えるところのよいアルバムアート
ワーク、これを今回しっかり作って、何よりも
いつも支援してくれているファンに楽しんで
もらいたい。こういう思いから飛行機に乗って
イギリス、ロンドンのある一人のグラフィック
アーティストのもとに行きました。

このアルバムアートワークを見て過去の彼
らが手掛けた作品をたぐっていくリスナーも
多いと思います。そういう方たちのためにお話
すると、70年代に英国でヒプノシスと呼ばれる
アートグループがあったんですね。彼らは今振
り返ってみても歴史に残るよいアルバムのフ
ロントカバーを制作してきた。10代の僕の記憶
の中でも、ピンク・フロイドもそうですし、
ビーター・ガブリエルもそうですし10cc(テン
シーシー)もそうですしね、僕の記憶に残って
いるアルバムアートワークのゴキゲンだなと
思うものはけっこうヒプノシスの手によるも
のが多い。その中心人物(編集部注:ストーム・
ソーガソン氏)は残念なことに二年前に亡く
なったんだけど、しかしそのヒプノシスの
精神を継いだグループのアーティストたちは
現存していて、そのうちの一人に僕は会いに
行った。この新作アルバムのフロントカバーを
手掛けてほしい、と言うかコラボレーションし
たいということをお願いに行った。そこでは

音楽との兼ね合い、音楽との響き合いが一番
大事だと思った。これはもう僕の方から直接
グラフィックアーティストに伝えるのが一番
わかりやすいですから、今回のアルバムの内
容はこうで、そして表現してみたい世界観は
こうで、ということを率直に彼らに話した。彼
らの方もいろいろと僕に質問して、そうした
ディスカッションをして、そのディスカッショ

デイジー・ミュージックの音に対する考え方。 それは、音はメッセージだということ。

後にだいたい10個くらいのアイデアが彼らから出てきて、その10個のアイデアの中から一つ選んでこれで行こうということで、順を追って仕上がってきたということです。

— 佐野さんのイメージする世界観をお話されたのですか。

元春： 僕の音楽については明解に話しました。明確に自分の音楽はこうだと、今回こういうことを唄っていると。日本ではこういうことが起こっている、そして僕の心象風景は今こんなことが浮かんでいると。そしてあなたの作品を僕は70年代から見ているけれども、あなたの作品の中で言えば例えばこうしたものにシンパシーを感じているといったようなプロフェッショナルなやり取りを充分やりました。

— 10作品あって選ぶのに迷われませんでしたか。もうこれしかない、という感じでしょうか。

元春： そうです。

— パッと見るとアルバムタイトルとすぐには結びつきませんが、よく見ると非常にいろいろなことが盛り込まれている、考えさせられるフロントカバーだと思います。

元春： それがアートだし、僕の作っている楽曲一曲一曲もそうです。僕は70年代の音楽から

育ってきました。70年代の音楽はもちろんアナログレコードです。アナログレコードにはしっかりとアートワークが添えられていた。僕は多感な頃からミュージック・ウィズ・アートワーク、これを一つの表現として楽しんできた。ところがCD時代になってグラフィック面積が非常に小さくなったところから、なかなか自分が思い描くミュージック・ウィズ・アートワークがいい形で実現しにくかった。ところが昨今はアナログレコードがまた復活してきて、僕はもう一度自分の好きな30センチ×30センチの、12インチのアナログパッケージの形態を使ってみて、それでできない表現をやってみて、ということと、イギリスのグラフィックアーティストとのコラボレーションを思い立ちました。

— このアナログ盤の大きさによる表現力、迫力にはやはりすごいですね。

元春： もし今10代20代でCDで育ってきたり、あるいはDLだけで育ってきている音楽リスナーがいるとしたら、その彼らにミュージック・ウィズ・アートワークの力の強さを知ってほしい。彼らの目に触れるといいなと思っている。また、そうした音楽の力、グラフィックアートの力を忘れていた大人たちにもぜひ見てもらって、あ、そうだね、こうした訴求力がアートにはあったね、ということも思い返してほしい。そのきっかけになればいいと

思っている。

— 昔は「ジャケ買い」という言葉があったくらいです。このアートワークは本当にインパクトがあります…！

元春： まさにジャケ買いしちゃう。

— ほんとです。さて今回、リスナーの音楽環境によって5種類の形態でのリリースということなのですが、HD（ハイレゾ）もUSBメモリーという形で販売されるということですね。

元春： 過去の音源、60年代、70年代の音源をHDフォーマットにしてDL販売しているという例は多くあります。しかし、今回僕らデイジー・ミュージックはHDのリリースを念頭に置いてこの「BLOOD MOON」を24bit 96kHzという、現在考えられる最高音質のフォーマットで録音しました。その最高音質のものをこのHD音源でリリースするということは意味のあることなんです。昔の、結局ブアナ音源をHDフォーマットにして水増しして聴いても、それほどHD音源のポテンシャルは生かされない。しかし、今回の「BLOOD MOON」レコードにおいては、HD音源のポテンシャルを100%引き出したサウンドになっている。ですので、HD音源で音を楽しみたいという方たちに自信を持って薦めることができます。

きる。一番大事なことを言います。デイジー・ミュージックの音に対する考え方。音はメッセージです。そこで何が唄われているか、どんな演奏がなされているか、歌詞をどんなふうに唄っているかも大事な点だけれども、そこで奏でられる音自体にメッセージが含まれます。だから僕は80年代から音に関してはとても意識的にやってきました。誰よりも早く海外でアナログカットイングをしてみましたし、誰よりも早く欧米のいわゆるヒットサウンドを手がけているマスターリングエンジニアと組んで音を作り、その都度、僕のファンにそれをプレゼントしてきました。

— 環境がないと聴けないものですが、ぜひ聴いてみたいです。

元春： このHD音源というのは言ってみれば、僕がレコーディングスタジオで聴いている音とほぼ同質な音です。僕がかねてからMP3音源は簡易で聴くにはいいけれども、本当の音楽の持っている力を十分にみなさん感じているのか疑問だった。でもこのHD音源は、僕たちがレコーディングスタジオで構築しているサウンドとほぼ同じ音なわけですから、それをみなさんのリビングルームに届けられるということは、素晴らしい価値があることだと思っっている。しかしこれは言ってみれば、原盤と同じクオリティのものです。原盤をユーザーに渡すということは大きなリスクも伴う。ここは意



MOON」と響きあう詩です。歌詞とは別です。あとダウンロード・パスキーを付けていますので未収録曲を一曲ダウンロードできます。

― 今回収録された12曲に入らなかったものですか？

元春： その前にバンドで遊びで録ったみんなびっくりするある人のカバー曲です。僕は自分のアルバムの中にカバー曲はあまり入れないのですけれども、時々は演奏してみることもあって、バンドとワイワイガヤガヤしながらバンド録ったいい曲があるのでポータスでダウンロードしてもらえないなと思います。

― あと100ページのブックレットもあるのですね。

元春： これはCBの最新フォト、スタジオやライブでのショットなどがあり、その間に今回のリリックが入っている、しっかり編集された100ページのブックレットになっています。

― かなりフォトが充実していると期待してよいのでしょうか？

元春： そうだね。ツアーでの写真とかスタジオで僕たちがどのようにレコーディングしているのが窺えるような写真とか、フォトグラフィアが撮ってくれていたものがないぶんたまっていたので、それをファンの方たちが喜んでくれるならまとめてみようということで編集しました。

― 詩は縦書きということですが、これから出されようとしている音楽詩集を見据えてというものになりますか？

― 詩は縦書きということですが、これから出されようとしている音楽詩集を見据えてというものになりますか？

― 佐野さんのアルバムは最初に聴いた印象と聴き込んでからのそれとは変わってくるでしょうか？

元春： それは当然です。ご自身の経験と楽曲の響き合いもあるし時代も人々の心も刻一刻と変化していつている。その変化の中で僕の楽曲との響き合いがあると思う。ですので本当に熱心なリスナーの方は、時代によって僕の楽曲がさまざまに表情を変えていく、ある時はその楽曲が自分にすごく近寄ってきたり遠くにいったりするという経験をなさった方が多いと思う。それは自然なことです。

― バンドメンバーは感想を話していましたか？

元春： 録音が全部終わりマスタリングが終わって、すぐに僕はバンドのメンバーに、マスタリング終わったよ、みんな聴いて、と持って行きました。「すごいアルバムに参加できて嬉しい」みんな一様にそう言っていました。

― 曲を削るというのは厳しい作業だったのではないでしょうか。

元春： 20曲を16曲に絞り、16曲を12曲に絞る過程でいろいろ試行錯誤はしました。ただもう出来上がったものに関して言えば、これしかない

音楽の提供形態が今回揃っている。このうちのどれが残っていくのかはリスナー次第なんです。僕はリスナーが望むところに行くだけです。レーベルの都合でもって音楽リスナーが右往左往するのではなく、音楽リスナーがこういう音が聴きたい、こうあるといいなというところを実現していく。これがレーベルの使命だと思っている。

― 世の中は今後どのような感じになると思われますか。

元春： すごく面白いのはこの一年で僕はロンドンやニューヨーク、ブルックリン、いろいろな街に行きましたけれども、どの街にもアナログレコードショップが新しく開店し、ハブニングしているということです。音の聴かれ方、音楽の楽しみ方が多様化してくるだろう、こういう傾向に今あると思う。僕もそうですしね。僕はレーベルオーナーとして、よい音楽とよい音を、リスナーの五感が喚起されるようなアートを届けていきたいという考えをもっていますから、その時々に応じて可能な限りリスナーの要望に応えていきたい。今回その結果としてこういう販売形態になるといことです。リスクはある、けれども未来があるならなせ歩みを止めるか、そんな感じ。

― バックページに収められるものについてももう少しお話しいただけますか。

元春： 初限定盤にはCDの他にDVDが付き撮り下ろしの6曲のミュージッククリップが収録されます。これも素晴らしい映像になってるので楽しんでください。それと僕の手書きの詩を1枚添えました。今回の「BLOOD

」のはバンドとのコラボレーションが高次元で進んでいったということでしょうか。

元春： 今回一年間でだいたい30曲くらいレコーディングしました。だから二枚組にしようかとも思ったんだけども、みなさん忙しい中、一枚聴くのも大変なんです。それを二枚組にすると聴く側にも負担がかかり楽しみが拡散してしまう。やはり10曲とか12曲が一つのテーマを完結させるにはちょうどいい曲数なのかなという思いは昔からあり、多くレコーディングはしたけれどもそれを全部聴いてもらいましようという乱暴なやり方ではなく、厳選してテーマのようなものをきちんと設けて、作品性の高いものをとということ。12曲選んだ。そうした意味では、短い期間に20曲以上録音したのは驚異的なことだと思いますし、それだけ録音した中から緻密な厳選された曲だけ選ばれていますから濃度の濃いアルバムになったと思います。わかりやすい言葉でいうと「凝縮かつおだし」みたいな感じ。よくかつおだしは凝縮して売っているでしょ？それにスプーン三杯の水を加えてくれだとか書いてある。あのようなコンデンス、凝縮された状態、みなさんのさじ加減次第でいくらでも楽しめるよという。ある人は大さじ二杯の水と小さじ一杯のみりんを入れて、ああこういう味付けになるのかと調理をする人は多いと思うけど、このアルバムも同じ。みなさんの調理の具合でいくらでも楽しめる「厳選かつおだしの素」の感じ。変なこと言ってるかな？(念委お料

元春： 形である前に僕がDLで物足りなく感じるのは、アートワークが不在だということ。音楽というのは僕たちの五感を喚起するものです。聴覚だけではなく、よい音楽であれば僕は味覚や嗅覚や視覚さえも刺激される経験を過去に持っている。そこに表現があればそういうことになるんです。そうしたら僕は映像も見えてくるし、また視覚的なビジュアルが見えてくるし、何かイメージがそこに湧き起こってくる。僕は音を音だけで楽しめないんです。音とビジュアル、いろいろな表現形態が多様にそこに混在している状態の中で僕は音楽やアートを楽しんできた。切り離せないということ。例えばDLでグラフィックアートがフロントカバーだけしかないということだと、それは何かすごく物足りない感じがする。だからデিজィー・ミュージックからの回答としては、我々レーベルが考える音楽表現というのはこういうものがある。ミュージック・ウィズ・アートワークで一つの表現だっということを主張したいと思っている。

音楽リスナーの聴き方が多様化しているのならば、それに対応していくのが音楽レーベルの使命だろう。

― 今後、佐野さんの作品はCDとともにHDとアナログ盤の両方をリリースしていくのでしょうか。

元春： ここは重要なところだよ。今回商品構成を見てもらえばわかるとおりに、一番左のデジタル、一番右のアナログですね。今や中途半端な形態になってしまっているCD、これももちろん需要がありますから置く。それとノンパッケージであるDL。今考えられるすべての

新作は、みなさんの調理のし具合でいくらでも楽しめる「厳選かつおだしの素」の感じ。

― さて、「COYOTE」から「ZOOEY」までは6年、それから「BLOODMOON」までは2年とリリース間隔が短くなっていますね。

元春： 自然な流れです。このアルバムの制作に入ったのは去年の早いうちだったと記憶しています。約一年かけて育んだ作品です。その間ツアーなどもあり、ライブとスタジオレコーディングを往復しながら作っていったアルバム。そうすることによってよいことは、生き生きとしたバンドの演奏がレコーディングできるということ。CBは一流のライブバンドだということ。今回のアルバムでも証明できた。それからこの「BLOODMOON」アルバムは前作の「ZOOEY」がなければできなかったし、「COYOTE」というアルバムがなかったら今回のアルバムはなかったと自分では思っている。ですので「BLOODMOON」に至る間に「COYOTE」と「ZOOEY」は必要だった。自分の中では制作にこの二つのアルバムが必要だったと言える。だから「コヨーテ三部作」という言い方を敢えてしたいと僕は思っています。「コヨーテアルバム」の完結編、それが「BLOODMOON」だ、ということ。す

― アルバム制作が比較的短い時間で終わった

見が分かれたところでした。僕の仲間たちで長い時間ディスカッションした。ある人は、「それは音楽ビジネス全体からいったら大きなリスクになる」。しかし一方で、「そのような高品質音源で供給したとしても、今までのCDやDLの売上に響くということは絶対ないと思う。それはマーケティングから見ても自信がある」というような分析をする人もいた。そのような議論を重ねた結果、レーベルオーナーの僕が下した判断は、もし現代の音楽リスナーの聴き方が多様化しているならば、その多様な聴き方に対応していくのが音楽レーベルとしての使命の一つだろうと、大きくその立場に立った。よい音で聴きたいという需要があるならば、やはり音楽レーベルとしては「これがそうだよ」と言って聴いてもらう。そこにリスクがあってもまずは聴いてもらって、その表現物の力、音楽の力といったものを感じてもらいたい。これはすなわちデিজィー・ミュージックのレーベルオーナーがアーティストだからです。佐野元春というアーティストだから。もしデিজィー・ミュージックのレーベルオーナーがもつと実務的な人だったら、下した判断は違うことになるかもしれない。それともう一つは、今年僕は僕のアニバーサリー、35周年であるということ。やはりファンのみなさんの支援でここまでやってきたという実感がある。この35周年アニバーサリー、この特別な年を記念してこうした特別なパッケージをみなさんにプレゼントしたいという思いも一方ではあります。むしろそっちの思いの方が強いかな。

― 世代的な感覚かもしれませんが、DLだとやはり物足りないというのがあります。USBメモリーの形であってもパッケージになっているというのは非常に嬉しいですね。

元春： 以前、ユーキャンから出したボックスの中に音楽詩集がありました。あの字体、字間、行間を踏襲しています。というのも、あれを編集する時に、字体、字間、行間、文字の形だとかを僕とデザイナーでものすごく試行錯誤しました。紙に定着された読むための、活字としての詩として一番美しいのは何かというのを追求して行き着いたものがあるので、今後は必要であればあのフォーマットを踏襲して僕の詩を読んでもらおうと思っっています。

― アナログ盤のレーベルのデザインはアルバムタイトルと関係があるのでしょうか。

元春： あれは僕がデザインしました。タイトルとは別に関係ないです。これからアナログで出す時はデিজィー・ミュージックからのレーベルにはこれを使おうかなと思っています。今後も使い続けられるような汎用性のあるデザインにしています。CDはその都度変えていきます。

― 確かにかつてのアナログ盤のレーベルはデザインが統一されていて、作品ごとに違うものではなかったですね。

元春： 86年に立ち上げたエムズファクトリー(M's Factory)レーベルの時もレーベルデザインはデザイナーと一緒に開発して、以降の作品では同レベルデザイナーを用いました。

出来上がった作品は、いれいかならいっくら曲もいれいかならいっくら曲順。



サービスのためのトークなどしなくても、『BLOOD MOON』という作品が訴える力はとても強い。

いという曲とこれしかないという曲順だけがある。

―なるほど、楽しみですね。(アルバム紹介文を見ながら)「20's&30's、ファンク、ディスコ、アフロ、フォーク、R&B、サイケデリックなど、ジャンルをまたいだサウンドを展開している」とのことですけれども。

元春：プレスリリースなので、読む人の立場に立って書いた表現ですね。別に僕は作る時にジャンルを考えているわけではない。リズムのバリエーションを多様に持ちたいという人が聴いたらどんなジャンルに聴こえるかわからないけど、僕自身、ジャンルは何にもこだわっていない。ブルースをやりたいからブルースをやるというような感じじゃない。自分の表現をしていったら、ブルースというフォーマットに近くなつたな、という感じ。テクノをやりたいとい

ってテクノをやるわけじゃないし、70年代フォークをやりたいといつてやるわけじゃない、形から入っていくわけじゃない。自分が作っていたものが、たまたま既存のいろんな音楽ジャンルに近づくことはあって、人々はそれを聴いた時、「○○っぽいね」とかバカな表現で言うことはあるのかもしれないけれども、最初からこういうジャンルで、こういうふうにしようなんていう発想じゃないです。僕の中には、サイケデリックもあれば、60年代、70年代のフォークリーなサウンドもあれば、R&Bもあれば、テクノ

もあれば、映画音楽もあれば、さまざまなものがある。もう一方で、僕は表現したいと思う言葉がある、リリックがある。そのリリックを、一番面白い形で聴き手に伝えるために、サウンドメイキング、サウンドのデザインがある。だから表現するにあたって、このジャンルでこういう表現をしているといった、言ってみれば、広告代理店的な発想で行うものではない。バンドのメンバーもそう。

―ナチュラルな発露なんですな。

元春：僕の言葉を選んでいく乗り物だ。それは新幹線であつても飛行機であつてもいい。古い50年代のビンテージカーであつてもいい。僕の言葉やイメージを運んでくれるものとしてサウンドのデザインがある。その結果、どんなジャンルに近いかということも聴き手次第。

―イメージはすごく深い。複合的なメッセージが、渾然一体となつているといつていい。だから単一的なイメージじゃない。多少国が混乱している時代なので、表現者としては、若干その混乱をありのままスケッチしようと努力しますから、結果、たどりに着く表現も、ケイオティック(混沌とした状態、無秩序)であつたり、サイケデリックであつたりする可能性がある。僕の場合はいつでもそう。感じたままのど真ん中を、くぐり抜けていったらいつの間にかここに来てしまいました、みたいな。ここにたどり着きたいから、こういうふうになりました、なんてことじゃなくて、いつも感じたままのど真ん中をくぐり抜けて、闇雲に走っていたらこんなところにたどり着いちゃつたつて感じ。『BLOOD MOON』もそうです。でもそうしてできたアルバムはすごくいいアルバムになりました。『ZOOEY』を評価してくれたファンがいるとしたら、それを上回るアルバムになるといことを僕の方から言っておく。

―とにかく早く聴いてみたいです。

元春：そして、これが30代ではなく、今現在の僕が作ったというところが自分にとっては驚異的だ。何かに導かれているとしか思えない。僕だけの能力で作ったとは思っていない。そこに、僕と一緒にいる人々がいて、その人々がいるような感情をもって生きていて、そして時代というものが短い時間に激しく動いて。そうしたケイオティックな状況の中で、何かいっぱしの表現をしようとしたら、それなりのブレない強いものの見方、感じ方というものが要る。状況に左右されることなく、自分の表現をまともに保つということはずごく大変だ。今回、僕はこの『BLOOD MOON』でそれをやり遂げたと思つている。そこにCBという、僕にとって最高の協力者と言つていいのかな、僕を支えてくれたメンバーがいてよかつたと思つているし、何よりも『BLOOD MOON』の完成においては、CBのミュージシャン一人ひとりのメン

―まずは先行でフル・プレビューされた『優しい闇』についてお願いします。

元春：もはや言葉だけでは誰も励まされない。励ますこともできない。そんな悠長な時代ではない。リリックだけ切り離して何か言われても僕は有効ではないんじゃないかと思ひ始めている。必要なのはビートだよ。強いビートだ。言葉とか観念とか形のない、根拠のないものを巻き込んでいくような強いビート。今必要なのはそれだと思ふ。

―さて、最近私たちのもとに届いている楽曲についてお聞きします。先日の35周年キックオフイベントにおいて三ヶ月連続でシングルをリリースするという発表があり、『君がいなくちゃ』『境界線』そして先月『優しい闇』がフル・プレビューでリリースとなりました。『優しい闇』はDL販売されるのかと思つていたのですが。

元春：『優しい闇』のフル・プレビューはビジネスではない。一言で言えば伝道だ。対価がそこに発生しようかな何かではない。それが理由でフル・プレビューした。それに比べて『君がいなくちゃ』はフォーマーシャルだ。『境界線』についてはちょっとまだよくわからないね。あともう一曲、すでにみなさんに聴いていただいている楽曲『私の人生』これは今ちょっと陰に隠れちゃつていくけれど、すごくいい曲。

―『優しい闇』はダンスロックだ。いろいろなことを感じながらダンスしてほしい。何かそこから考えてほしいとは全然思つていない。この曲を聴いて、いろんな感情を持つて踊ろうよと言つている。そういうビートに溢れたゴキゲンな演奏だ。ゴキゲンなドラムとゴキゲンなベース、ギター。そして誰もやらなかったようなやり方で、そのビートに日本語を乗つけている。新しい時代の日本語による新しいダンスロックだ。いちいちこういうことを言うのも野暮な話だけど、そこに注目してほしい。そこにどんなことが唄われるのかというのは僕にとつては二の次なんだ。今僕に必要なのは強いビート。言葉なんて本当にあてにならない。

言葉によるコミュニケーションというのは本当に時間がかかるし、のろまだし、あとどれくらい生きるかわからない僕にとつてはほとんど

かしい。信じられるのは強いビート。全てを巻き込む強いビート。今回のアルバム全体を貫くのはそれだ。

―続いて『私の人生』。これはウェブドラマ(遠回りしようよ、と少年が言つた。)の主題歌として使われていますが、残念ながらフルバージョンでは聴けていない状態です。

元春：『私の人生』について言えば、ウェブドラマの主人公がちょうど40代、50代、僕の中心的な音楽リスナーの世代と重なるところがある。僕は常に僕の音楽を支援してきてくれたジェネレーションには恩義を感じているので、そうした世代が主人公のドラマに曲を書くことは僕にとつてはずごく自然なことだね。だから引き受けて曲を書いた。

―今後DLなどの形で聴けるようになるのでしょうか。

元春：今のところ何も考えてない。でも録音はされているし、あとはミックスしてマスターングすればいつでも公開できる。ただ今回のアルバムに収録するにはちょっと意図が違うなと、テーマが違うなと思つて外しました。『君がいなくちゃ』も同様ですね。でも純粋なシングルカットナンバーとしてそこにあるというのはいんじゃないかなと思ふ。

―ドラマも観ましたけれども、すごくよかつたです。

元春：僕は楽曲の方がいいと思つたけど(笑)。

―もちろんその楽曲が最後に使われるところ(笑)。最初にまずインストールメンタルで流れますよね。曲はどこに出てくるのかなと思ひながら観ていると最後のあたりに出てきて、最終話で楽曲の全体像がわかるという感じでしたけれども、非常に胸に響く曲でした。

元春：僕の得意なウォール・オブ・サウンドだね。『サムデイ』から始まつて『月夜を往け』とか、前回の『ZOOEY』アルバムでは『虬をつかむ人』。一連の自分流のウォール・オブ・サウンドの延長にあるサウンドです。すごくいい録音になつている。もちろんライブでも演奏できるし、発表するのはいつでもいいやつてい感じ。アルバムということになると僕はやっぱり作品性を追求するので、今回の『BLOOD MOON』に入るか入らないかと言つたら、残念ながら入らなかつた。いつか発表したいと思つていくけれど。

―新しい曲としては『私の人生』を含め4曲、そのうちの二曲がアルバムに収録されるということですね。そのアルバム収録曲の中の『キャピアとキャピリズム』ですが、これは以前、吉本隆明

今僕に必要なのは強いビート。言葉なんて本当にあてにならない。

さんが亡くなった時にフェイスブックの方に書かれた詩が曲になっているということですか。

元春： そうです。よくある僕のプロセスです。最初にちゃんと詩があり、それをもとに楽曲化していくという昔から僕が時々やっている手法です。例えば雑誌「THES」に「インディビジュアルリスト」の原型を詩として提出し、それが後に楽曲になるというファンにお馴染みのプロセスかなと思っっています。

35周年アニバーサリーツアーについては検討中。スペシャルバンドになるかな。

— どんな楽曲になっているのか、楽しみにしております。さて、このアルバムの楽曲をライブで聴けるのはいつからになりますか。

元春： 夏の野外フェスでは、出演する時間帯とか天気に応じて柔軟に曲を選んで演奏するの、楽しんでほしいと思っっている。そこに集まっているいろんな世代の人にゴキゲンな気持ちになっってもらいたいから、その時々に応じて。そのあとにくる、ライブハウスツアーもすでに予定されている。主要都市以外の街でのライブツアー。ここではもちろんこの新しいアルバムからの曲を披露していきたいと思っっているし、すでにCBとしては、スタジオアルバムが「COYOTE」「ZOOEY」そして今回の「BLOODMORN」と三枚目になり、30曲以上のオリジナルな楽曲がありますから、それをやるだけでも一つの形になるかなと思っっている。その先の35周年アニバーサリーのホールツアーは、これまでの僕の音楽を支援してきたファンが楽しんでくれるようなセットリストになるかなあと、まだ具体的ではないけど、おおざっぱにそんなことを考

えています。

— ホールツアーもCBとなるのでしょうか。

元春： ホールツアーは35周年アニバーサリーツアーですから、今まで僕にかかわってくれた、ゆかりのミュージシャンたちで構成するスペシャルバンドになるかなと思っっています。

— ライブハウスサーキット、及び夏フェスはCBでの出演ということで新しいアルバムからの楽曲が披露される可能性が高いということですね。

ライブ、新作発表、ツアー……もういっぱいいっぱい。あとどこに喜参りを入れようかという感じ(笑)。

— ビルボードライブについてお聞きします。前回、前々回に続き今回も大変素晴らしいステージとなっています。

元春： そうですね、今月で終わりになってしましますけれども、シリーズ三回目となりまして、前からこのフォーマットは僕たちにとっても、来てくれたファンの人たちにとっても、なじみの深いものになってきたかなと思っっています。ステージでも言っっているんだけど、過去の自分の楽曲に新しい解釈を加えて、素晴らしいザ・ホーボーキング・バンド(HKB)のミュージシャンたちとのライブでのあのような表現は、やっていてすごく楽しいですね。一番楽しんでもらいたいのは何と言っっても選曲だと思っんです。過去のあの曲がこういうアレンジになって……という楽しみ。本当は三ヶ月続くので、毎月もう少し曲を変えていけるといいなと思っっているのは山々なだけども……今度やるとき

はそうします。でも、前回や前々回のセットリストからは8割くらい変えているので、演奏している僕らとしては新鮮な感じを持っていきます。HKBはジャムバンド的な要素があるから、同じ曲を演奏しても、毎回表情が違ってくるのが面白いなと思っっています。

— 今回のビルボードでは一曲「仕事帰りのおんなたち」という新曲が披露されていますね。

元春： ビルボードシリーズも三回目、あの空間にあった曲を作りたいということで作った曲です。そういう曲が二、三曲あるんですけどもその中で一番オススめの曲です。あの曲も評判がよければ、レコード化していつでも聴けるような状態にしたいと思っっています。

— ビルボードを飛び出して、5月に行われた横浜赤レンガ倉庫での野外フェス(GREENROOM FESTIVAL)での演奏も素晴らしいですね。

元春： ビルボードの演奏はご存知の通り、どちらかというクワイエット(静かな表現なので、ああした春の野外の雑多な環境でのクワイエットな感じというのが生きるのか不安だったんだけど、でも、演奏した時間帯、雰囲気、音質、観客の反応、僕が唄っている中、時折、唄の中で僕が言い放った言葉に反応して、多くの観客が歓声を上げていたことがすごく興味深かった。僕のファンにとってはおなじみのリリックでも、僕のことをあまり知らない聴衆にとっては新鮮に響くラインもあるんだなということを感じました。ああいうフェスティバルでは外国のバンドも多いだろうし、英語だど何を唄っているかわからない人たちもいると思っけど、僕は日本語をはっきり唄います

し、音楽の中の言葉、言葉の中にある音楽、といったものをあの場にいた聴衆はみんなすごく自然に楽しんでくれたようでした。

— 8月、9月にはCBを引き連れて、北海道、東京、栃木と三つの夏フェスへの出演が発表されています。

元春： 35周年なんですね、そういうことを聞きつけてか、主催者から出てくれないかというオファーもあり、バンドのメンバーのスケジュールを調整して出演します。

— 夏フェス出演はこれからさらに増えることあるのでしょうか。

元春： バンドのスケジュールもあるし、もういっぱい。ビルボードが終わり、新作アルバムの発表があって、ライブハウスツアーがあり、ホールツアーがあり、その間に夏フェスがあった……ということでスケジュールはいっぱいいっぱい。あとどこに夏の喜参りを入れようかという感じ。それだけは外せませんから。

— ライブハウスツアー、ホールツアーのスケジュールはいつ頃になるのでしょうか。

元春： ライブハウスツアーの発表はもうそろそろになると思っいます。いわゆる35周年アニバーサリーツアーというホールツアーは12月から来年の3月くらいにかけてになるかな。

— まずは新作アルバムですね。ファン一同楽しみに待っています。本日はお忙しいところありがとうございました。





INFORMATION

＊137

ファンクラブの熱い思いをペンに、またキーボードに託して、編集部までお寄せください。
Cappuccino Talk Meeting

このコーナーでは毎月募集するテーマに対し、ハガキ、封書などによる従来通りの投稿を受付するのに加え、インターネット上のmofaサイトのwebCbと連動して、サイトを通じて書き込んでいただくことも可能になりました。投稿方法に関わらず、本誌次号のコーナーに掲載されるチャンスが生まれます。皆さん奮ってご参加ください。

MAIL ORDER
カフェホヘミア
バックナンバー
MOTOHARU NEWS LETTER「カフェホヘミア」のバックナンバーは引き続きMAIL ORDERを受け付けています。売り切れの際は返金させていただきますので、あらかじめご了承ください。なお、現在購入可能なバックナンバーはVol.43、50～56、58～136です。他は売り切れですのでご了承ください。

- ◎1冊 ￥825（消費税込）
- ◎郵便振替でお申し込みください。
- ◎振替用紙に次の事項を記入して商品代金と送料料の合計金額をご送金ください。

口座番号：00180-3-16594　加入者名：モウファA

通 信 欄：希望の号名、数、会員番号、電話番号
- ◎送料料は、全国共通です。

1冊 ¥300、2～5冊 ¥450、6～12冊 ¥600、13冊 以上¥1,200
- ◎お申し込み受付期間　2015年9月30日（水）まで当日消印有効

☎ **テレフォンインフォメーション**
mofa（モウファ）では、元春の最新情報をお伝えする24時間テレフォンインフォメーションサービスをおこなっています。スタッフからのメッセージと最新の情報を随時流していますのでご利用ください。
tel：03-5469-0922（スタッフの対応は平日の月曜～金曜15:00～17:00）

📧 **ファンレター**
元春宛のお手紙・プレゼントは、「佐野元春様」と明記してmofa宛にお送り下さい。スタッフが責任をもって元春に渡します。他の係宛とは別送をお願いします。

編集部へのお便り
カフェホヘミア編集部ではみなさんからのお便りを随時お待ちしております。ご意見、ご感想、編集部への提案など、何でもお寄せ下さい。住所、お名前、会員番号を忘れずに。

✉ **e-mail：cb@mofa.moto.co.jp**

事務局へのお問い合わせ
事務手続きなどでご不明な点などございましたら、mofa事務局までお気軽にお問い合わせ下さい。メール・fax・電話・お手紙で受け付けております。

✉ **e-mail：member@mofa.moto.co.jp**

全てのお便りの宛先
郵送：〒150-8691　東京都渋谷区支店私書箱76号　mofa事務局内　各係
fax：03-5469-3179　※mofaオンラインサービスをご利用の方はe-mailをご利用下さい。

※件名に各係宛の明記と本文中に「会員番号」「お名前」をお忘れなくお願いします。

「BLOOD MOON」特設サイトを見ました。まずジャケットのアートワークにガッタンとやられました。「一目見たら忘れられません。」**👀**から内容の充実ぶりがそこはかとなく伝わってきます。なぜかしら大音量で30年ぶりくらいにアナログレコードで聴いてみたいとの気持ちにもなりました。プレイヤーがないので無理なのですが…（矢島一朗）

発売直前でありながら、ファンの方皆さんの楽しみを尊重したいということでのインタビューでは内容については一切言及いただけませんでした。が言葉の端々から新作「BLOOD MOON」に対する確固たる自信が感じられました。初回限定盤の特典としてダウンロードできる「みんながびっくりするある人のカバー曲」についてはインタビュー後の編集作業中に公式フェイスブック上で発表されました。大瀧詠一さんの「あつさのせいーでしたな。我々ファンは未収録曲ダウンロード・パスキがあつてもなくても購入するでしょうが、日本でも定額制音楽配信サービスが本格化してきたように、これから音楽ビジネスも大きく変わっていくのでしょーうね（山田和恵）

写真／ライイチヤ

読者投稿コーナー　募集内容
締切り：2015年8月31日（月）必着
「BLOOD MOON」や「2015サマー・ツアー」、元春にまつわる感じたことなど、自由にご感想をお送り下さい。
http://mofa.moto.co.jp/pc/members/fangine/ctm/index.jsp

会員証再発行
会員証を紛失した場合は、実費＋送料手数料で再発行します。郵便振替で会費口座へ500円を送金してください。

通信欄：会員番号、会員証再発行希望、電話番号をご記入ください。ご送金後、約1ヶ月で新しい会員証をお届けします。※ 会員証再発行は郵便振替のみでの受付です。

クラブ継続
「mofa」オンラインサービスへアップデートされることによりオンラインによる手続きが可能です。アップデート手続きは、無料です。まだの方は、ぜひ、「mofaサイト」をご利用ください。

◎アップデート手続きはこちらからー http://mofa.moto.co.jp/
オンラインによるカード決済、コンビニエンスストアをご利用頂けます。従来の郵便振替による受付も今まで通り可能です。

期限切れ後3ヶ月間は継続手続きが可能ですが、その場合期限月にさかのぼっての処理ではなく入金された月からの一年間の継続となり会費未納期に出された会報、DM等は一切お送りできません。4ヶ月以上未納の場合は再入会となります。会費は期限の切れる月の20日までにmofaオンラインサービス又は郵便振替にてご送金下さい。期限切れはトラブルの原因になりやすいので充分気をつけてください。

※ 会員期限証（受領証）は振込受領証またはカード引き落とし明細でご確認頂ける為、発行は致しませんのでご了承下さい。
※ 会員期限は、mofaサイト・発送物宛名シールにてご確認いただけます。宛名シールの出力準備の都合上、末日に継続手続きされた方は旧期限のデータで表示されますが、手続きに不備などなければ完了しております。

郵便振替口座番号：00190-1-106838
加入者名：モウファ
送金金額：1年¥5,000
通信欄：継続希望と会員番号、電話番号
※ 旧用紙でもご送金頂けますが金額にご注意下さい。

住所変更
住所、氏名が変更になる場合は、速やかに「mofa住所、氏名変更」係まで、おハガキでご通知下さい。mofaオンラインサービスをご利用の方は、フロントデスクのMOTO TVの下にあります、「メンバーシップ情報」よりご自身で登録データの変更が可能です。尚、発送物の関係上、必ず郵便局に転送届を出すのもお忘れなく。他の係宛のものに同封されますと手続きが遅れる場合がありますので、必ず別送してください。

昨年のリベンジで4月にポール・マッカートニーのコンサートに行ってきました。世間でもよく言われていることですが、とにかく72歳（現73歳）とは思えないヴォーカル力でしたバンドの演奏方もパッチリ。メンバー同士が目を含わせながら笑顔で演奏しているところは、視覚的にも楽しめます。ポールのキャリアの中では1番長いバンド。スクリーンに映し出される映像も凝っていて、ローリング・ストーンズほどの派手さはないものの、楽曲のイメージを喚起させる大変ショーアップされたステージでした。50年間のキャリアを総括したようなセトリリストでの世代でも楽しめる内容なのですが、新作からの楽曲も必ず演奏する現役観はさすがです。日本のポップスは少なくなるとも10年は遅れていますね。洋楽を聴いたあとはみんな歌謡曲に聴こえます。（小林史明）

編集後記
「BLOOD MOON」のフロントカバー、見るやいなやスタッフ皆ため息。衝撃です。アナログ盤は本当に迫力で、飾るなら実にこのサイズ。このアートワークの意味するところや世界観、12曲をじっくりと聴きながら読解きバズルよろしく自分なりに感じてみたい、いろんな発見ができてさうです。とにかく待ちきれませんね！この夏は、夏フェスにサマー・ツアーが続きます。35周年、予告通り着々と進んでいます！暑いライブをみんな楽しんでみましょう。（奥山千恵紀）

佐野元春 and The Hobo King Band Billboard Live 'Smoke & Blue 2015'

Band Member　古田たかし (Drums)、井上富雄 (Bass)、Dr.kyOn (Keyboards)、笠原あやの (Cello)

【セトリスト】
2015年4月1日（水）
ビルボードライブ東京
1st.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.ジャスマンガール
5.エンジェル
6.マナサス
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.レインガール
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2nd.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.エンジェル
5.マナサス
6.7日じやたりない
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.約束の橋
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2nd.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.エンジェル
5.マナサス
6.7日じやたりない
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.約束の橋
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2nd.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.エンジェル
5.マナサス
6.7日じやたりない
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.約束の橋
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2015年4月24日（金）
ビルボードライブ大阪
1st.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.ジャスマンガール
5.エンジェル
6.マナサス
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.レインガール
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2015年4月2日（木）
ビルボードライブ東京
1st.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.ジャスマンガール
5.エンジェル
6.マナサス
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.レインガール
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2nd.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.月と専制君主
5.エンジェル
6.マナサス
7.C'mon
8.クエスチョンズ
9.仕事帰りのおんなたち
10.観覧車の夜
11.ドクター
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2nd.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.エンジェル
5.マナサス
6.7日じやたりない
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.約束の橋
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2015年5月17日（日）
ビルボードライブ東京
1st.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.エンジェル
5.マナサス
6.7日じやたりない
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.約束の橋
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2015年5月13日（水）
ビルボードライブ大阪
1st.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.エンジェル
5.マナサス
6.7日じやたりない
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.約束の橋
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2015年5月17日（日）
ビルボードライブ東京
1st.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.月と専制君主
5.エンジェル
6.マナサス
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.約束の橋
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2015年5月23日（土）
横浜・赤レンガ地区野外特設会場

1.夜のスウィンガー　インスト
2.トーキョー・シック
3.月と専制君主
4.マナサス
5.C'mon
6.カム・シャイニング
7.約束の橋
8.ドクター
9.夜のスウィンガー

6.マナサス
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.レインガール
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2nd.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.月と専制君主
5.エンジェル
6.マナサス
7.クエスチョンズ
8.クエスチョンズ
9.仕事帰りのおんなたち
10.カム・シャイニング
11.観覧車の夜
12.約束の橋
13.ドクター
14.夜のスウィンガー
15.ハッピーマン

2nd.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.月と専制君主
5.エンジェル
6.マナサス
7.クエスチョンズ
8.クエスチョンズ
9.仕事帰りのおんなたち
10.カム・シャイニング
11.観覧車の夜
12.約束の橋
13.ドクター
14.夜のスウィンガー
15.ハッピーマン

2015年5月18日（月）
ビルボードライブ東京
1st.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.エンジェル
5.マナサス
6.7日じやたりない
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.レインガール
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2015年5月14日（木）
ビルボードライブ大阪
1st.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.エンジェル
5.マナサス
6.7日じやたりない
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.約束の橋
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2nd.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.月と専制君主
5.エンジェル
6.マナサス
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.レインガール
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2nd.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.月と専制君主
5.エンジェル
6.マナサス
7.C'mon
8.クエスチョンズ
9.仕事帰りのおんなたち
10.観覧車の夜
11.レインガール
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2nd.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.月と専制君主
5.エンジェル
6.マナサス
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.カム・シャイニング
10.観覧車の夜
11.レインガール
12.ドクター
13.夜のスウィンガー
14.ハッピーマン

2nd.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.月と専制君主
5.エンジェル
6.マナサス
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.レイナ
10.カム・シャイニング
11.観覧車の夜
12.レインガール
13.約束の橋
14.ドクター
15.夜のスウィンガー
16.ハッピーマン

2015年6月17日（水）
ビルボードライブ大阪
1st.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.月と専制君主
5.エンジェル
6.マナサス
7.クエスチョンズ
8.仕事帰りのおんなたち
9.レイナ
10.カム・シャイニング
11.観覧車の夜
12.レインガール
13.約束の橋
14.ドクター
15.夜のスウィンガー
16.ハッピーマン

2015年6月21日（日）
ビルボードライブ東京
1st.Show:
1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.月と専制君主

2nd.Show:

1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.月と専制君主

2nd.Show:

1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.月と専制君主

2nd.Show:

1.トーキョー・シック
2.こんな素敵なお日には
3.夏草の誘い
4.月と専制君主